

ふるさと風

第78号 (2012年11月)

風に吹かれて (56)

白井啓治

『秋風のやってきて呟いた』

出る杭の無ければ紡ぐ夢も無し』

出る杭は打たれる。：頭角をあらわす者はとかく他から憎まれ、妨害をうけるという意味であるが、窓を開けて朝のネット情報を開いていたら、肌寒い秋風が吹きこんできて「出る杭が無ければ紡ぐ夢もないよ」と呟いて抜けて行った。妙な言葉が耳に思い出されたものだ。とPCのモニターに映し出された朝のニュースを見たら、成る程、出る杭を打つような記事ばかりであった。おもねりメディアの記事を見ると夢を紡ぐ気持ちがない。えてくる。

朝のテレビニュースなどを見ていると穿った見方で、出る杭を打つような、打たないような、どうでもいいコメントを恰好つけて言っている奴らが何処のテレビ局にも顔を出している。恰好つけの奴等は、出る杭を思い切り叩くと後で困るので叩いた振りをしている勇気のない風見鶏の衆だ。赤信号みんなで渡れば怖くない、と本気で思っているのだから救いようがない。

多数決で、「俺はあの時反対した」は免罪符ではないし、反対しても多数決で意見が通らなければ、

自分も賛成したことになる、という責任を考えた事はないのだろう。将来の結果への責任は、現在の人達全員にあるのだということに認めたくないのだろう。

打田兄が、歴史の嘘をテーマとした長編を書き終えた事はすでに紹介したが、今朝(10月30日)の朝日新聞に、アメリカの歴史家ジョン・ダワー氏の話が載っていた。

『私は現代史の研究者として、戦争と平和の問題に時間を費やしてきた。その中で、特に関心を持ってきたのは「歴史」と「記憶」の関係である。歴史は過去の研究のように見えるが、常に現在の人間が利用し、多くの場合は誤用する。そのため、記憶と歴史の関係は今日の世界情勢にも影響し、しばしば議論を巻き起こす。現在の日韓、日中関係ではそれが強く表れている』と。

こんな話を改めてこの会報に書くと、歴史の里と自慢したいこの地には苦々しく思う人が少なからずいるであろう。小生としては、苦々しく思っていただけでは幸いなことであるが、歴史とは自慢や顕示の道具にするものではない。打田兄の言うように歴史の記録とは勝者の都合で著わされると言えよう。だから、ジョン氏の言うように、「歴史は過去の研究のように見えるが、常に現在の人間が利用し、多くの場合は誤用する」という認識のもとでの考察が重要なのである。何百年の歴史があると自慢する事の愚かよりも未来の夢を紡ぐ力を育む里であることを誇りにすることが重要であり、歴史を大切にすることだと言えよう。自慢のための捏造の歴史の中には希望はない。歴史を学ぶ、研究するとは希望を紡ぎ出すことを言うのである。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

手代木

テシロギ(梁(ヤナ))

所在・語源

つくば市の小野川沿いに大字手代木、宮城県角田市に手代木と手代木沼。漢字を見ても発音を聞いても、皆目意味のわからないそれは、アイヌ語で、【tes 編み連ねたもの(※網)、魚を捕る梁】[nok 坐っている(仕掛けてある)]【iところ】その追加開音節化、tesiroki テシロギ。なお、神奈川県では漁網の繊維によりをかける紡錘をテスリツムという。これも【tes 漁網】[rit 筋]【chup 紡ぐ】に違いない。川に簾を敷いて流れてくる魚を受け止める梁はアイヌ語【ya 網】[ne である]に対応している。

転音 testiroki→tesiroki yane→yana

静・瓜連

シヅ||繊維

所在・語源

「静織(シドリ)の里あり。上古(イニシ)の時(ヨ)、綾(シヅ)を織る機(ハタ)を知る人あらざりき。時に、此の村に初めて織りき。因(ヨ)りて名づく。」(常陸国風土記 久慈郷。現在の那珂市大字静のことで、和名抄の郷名には「倭文」とある。日本書紀 神代下に「倭文神、此をハ斯(ス)梨(リ)俄(ワ)末(シ)ドリガミ」と云ふ」とある通り、倭文もシドリと読む。というより、各地のシドリに当てられたのが倭文であった。そのなかで、常陸国風土記だけは風土記撰上令にしたがって好字の静織をあてた。その静を採ったのが今の大字静(シヅ・旧静村)である。

ではなぜシドリに倭文があてられたか。そして、シドリの語源はなにか。漢語で倭は古代の日本、

文はスズとアヤの意味があり、アヤには模様のほかに、葉脈や木などの内側にある硬い筋の意味があった。つまり、倭文は日本古来の繊維ということである。シヅはアイヌ語【sizu 繊維、山ブドウの蔓】、シドリは、【siru 繊維】[rit 筋]の r→o 語尾子音の消去母音化、sitorit であった。あるいは、【situri 伸びる】(si 自分を turi 伸ばす)もの || 繊維) が考えられる。具体的事象を表す言葉しか持たない縄文系にすれば、この方が本筋かもしれない。縄文語で繊維のことをシドリ、漢語では倭文なので、シドリに倭文をあてたということであろう。シヅ(繊維)を織ったからシツオリ→シドリもありうるが、それだと、倭文||シドリの説明が困難になる。

静に隣接して大字瓜連(ウリツゴ)がある。なぜか、こちらは以前からアイヌ語だと言われて来た。そうであれば、【uri 丘、岡】[uturu 境、間、奥]の消去単母音化、u→a uritura ウリツラが考えられるかもしれない。

転音

siturit→siturit urituru→uritura

転音

siturit→siturit urituru→uritura

随分附

チムサンツケ：アボツケ、ウリヅラ

とともに、ナムサンツケもアイヌ語だと言われている。しかし、非才な私にはそれをアイヌ語で解読する力はなく、それは日本語由来ではないかと考えている。水戸市旧内原町の大字に随分附(古いパソコンでも、随分附と入力しルビを押したら、ナムサンツケという振り仮名が明示された。その小字の一つに念仏塚があった。ナムサンというのは南無三寶の略で、救いをもとめる時に仏・法・僧に呼びかける言葉だという。ならば、ナムサンは念仏、ツカ(塚)の a→o でツケ、それは念仏塚のことではなかったか。ただし、随分調べて見

ただ、ナムサンに随分をあてた根拠はわからなかった。

さらに、石岡アイヌ語説にも出会った。石岡市教育委員会『石岡の地名』(平成8年)には次のように書いてある。——「古老が言うには「いしおか」とは「うしおか」と言うアイヌ語より出たもので安住の意味を表すと言う。アイヌ語辞典をみたところ石は明らかに「ウシユ」で、岡は「オガ」とあった。石岡は「ウシユオガ」と発音されたようである。意味は石は森の多いことのようにあり、岡は広い土地と言う意味を持つようである。しかしながら安住即ち住むに安らか意味することになるかと解される。アイヌ語起源説」は最も魅力的である。諸説の中では最も説得力をもつと考える。——残念ながら、私の浅学な内蔵辞典にはそのような語源はない。

蝦夷・夷

エゾ・エビス(縄文系在住民)

所在・語源・転音

笠間市押田(辺?)に蝦夷、鉾

田市常磐にゑそはさまゑぞはさ満(マ)、櫻川市大月に江ノ川、古河市上大野にエゾ内、同市水海・稲敷市古渡にゑびす内、常陸太田市上利員に夷内(エビスウチ、東海村村松に夷塚・夷塔など。さらに、利根町の対岸、千葉県我孫子市布佐にも江蔵地(エゾ内・エゾ地?)があった。

アイヌは縄文系在地民やアイヌ自身の呼び名であり、エゾ・エミシ・エビスはアイという連母音の発音のない渡来側の a→e 転音に基づく呼び名である。アイヌ語に【avnu 男、人】がある。狩漁社会では、主役である男が人を代表する。した

がつて、アイヌの原義は男であろう。そしてそれは、【ay 矢、とげ】【nu 持】に分解できる。アイヌは矢持ち⇨狩人であり男である。また、古事記に「丹塗矢」が「美人の富登を突き」「壮夫に成る」話があったように矢は男のシンボルであり、矢を持つのは男である。本州の縄文系在地民も自分たちをアイヌと呼び、渡来系がそれをつぎのよう

に転音したのではなからうか。
aynu → (ay → e) → anyu → (ny → jy) → ejyu → ejyo
→ ezo aynu → (ay → e) → anyu → (開音節化) → eminyu → (ny → jy) → emjyu → emji → emis → (m → b) → ebisu (ny → jy 例: 柔・入ニユウ↓ジユウ、女・如ニョ↓ジヨ)。エゾ内・エビス内等は、縄文系の末裔が純血を保ちながら集団で居住していたところに対する渡来系の呼び名であろう。なお、茨城の地名にエゾ・エビスはあるが、エミシは見当たらない。

江添という小字名もある。北茨城市に3、常陸太田市4、常陸大宮市・那珂市・ひたちなか市・鉾田市1、水戸市に江添3・水江添2、稲敷市水江添1。これらはエゾエと呼ぶが、常陸市花島町の絵添・絵添久保・絵添中・絵添下・絵添下中はエゾイと読む。これらは、エゾキ(蝦夷居) ↓エゾエで、後世、縄文系の後裔がまとまって住んでいたところかもしれない。ただし、江が入り江や大川ばかりでなく小川も含めていたとすれば、川沿いという意味になる。

馱弁 恵比寿…七福神の一に、鯛を釣りあげ、人の良さをうなニコニコ顔の**恵比寿**(エビス)様がいる。寄り鯨や漂着神のいわれがあり、漁民の豊漁の神である。青森や茨城の浜では鯨のことであり、ジンベイザメを言う地域もある。それはカツオを連

れてくるからだという。東国の制圧を進めていた渡来系支配層は、抵抗する縄文系在住民を「招(ラ)き慰(コシラ)へ(招きなだめ)らるることなき「東(アツマ)の夷(エビス)の荒ぶる賊(ニシモノ)」(常陸国風土記 新治郡)とさげすみ目の敵にしていた。その夷(エビス)とこの恵比寿(エビス)が同じはずがない。が、そのことに触れた人はない。夷の語源は右記の通りであった。では、恵比寿の語源は何か。日本語ではわかりそうもないそれは、アイヌ語の【episne 浜の方へ来る】(e 頭が pis 浜 ne なる・である⇨沖から浜の方に向かってくる)の後略、追加開音節化、episune Hユスであろう。水平線の彼方から幸(エモノ)を伴って訪れる漂着神や寄り鯨をそのようにアイヌ語で名づけたのは、縄文語で話していた日本人にほかならない。その【pis 浜】は p→h→k でピシ(大隈国風土記逸文・万葉集・沖繩洲) ↓キシ(岸)となった。episne と同様な発想で、【okinne 山の方から】(o 尻が kin 山 ne である⇨里山を後ろにした前方)がある。同じくその後略、消去開音節化、okinne オキ(沖、香川・愛媛 海、香川 大分 海浜、長崎・愛媛・岡山・三重 広々とした田畑・野良、福島 平野 島根 家の後方に対して前方、神奈川県津久井 奥(オキ)。通常は下方であるが、津久井のように、里山の後ろということ、上方⇨奥をさすこともある。谷川岳の双耳峰はオキの耳・トマの耳(奥の耳、手前の耳)と呼ばれている。なお、地名のエビスは旧カナでゑびすと書かれた。ゑは**恵比須**の**恵**の草書体によるが、エビス

ビールのエビスのローマ字表記は**EBISU**(ア行えびす)でも**WEBISU**(ワ行ゑびす)でもなく、**YEBISU**(ヤ行)となっている。これは古いローマ字綴りでエ・エどちらも ye とつづることがあ

った名残とされ、日本円を Yen と表記するのもかつては江戸を Yedo と綴ったことがあったのも同じ理由だとされている。商標の両側に BORN 1887 と書かれているのと合わせて、創業の古さを誇示していると見るべきか。

太田善光寺万灯祭 木村 進

今月から「ふるさと風の会」に入会させていただきました。これまで1年以上にわたり会の皆様とは交流をさせていただいてきましたが、毎回の記事を書く自信もなく、入会を躊躇しておりました。しかし、定年後しばらく継続して勤めていた会社での仕事も減ったのを機に、本会に入会させていただくことにしました。地域に眠る歴史などにスポットを当てて記事を書いていければと考えています。これからは会員皆様の足を引つ張らなようにしたいと思います。どうぞよろしく。

さて、旧八郷の太田地区には国指定重要文化財「善光寺楼門」があることはよく知られています。記録によれば、この善光寺境内では旧暦6月14日(現在の7月下旬)の晩に「太田の万灯祭」が盛大に行われていたといえます。しかし、いつの間にか祭りは行われなくなり、現在では善光寺楼門入ったところにある「太田地区田園都市センター」で善光寺御本尊の阿弥陀像を祀って、地元の世話役による祈願祭のみが行われているといえます。この万灯祭について地元の方にお聞きしたことによると、昔は祭りの3日前に楼門の前に旗を掲げ、善光寺の池の掃除をし、竹を伐り出し、万灯

の準備をしたそうです。しかし東京オリンピック前後の高度成長時代になって、平日では人が集まらなくなり、この準備は祭りの1週間前の日曜日に実施されるようになりました。まず境内にある池の掃除をし、そして万灯作りを行います。この万灯がどのような形をしていたかがわからなかったのですが、つい先日、境内に建てられている田園都市センターの集会所にミニチュアサイズの模型と、昔作った時の写真が飾られていたのを偶然見ることができました。

これによると、真ん中に高い梯子を立て、その両側に太い竹の棒(約6m)に縄を螺旋状に巻きつけたものを6本を準備し、それをはしごの上の方に放射状に櫓を組むように縄で固定します。そして、真ん中のはしごの上端に「太田」と書かれた提灯や御幣などを取り付け、また太い縄を数本結びつけて、両側から人が引つ張れるようにして完成です。

さて、祭り当日は、この万灯のはしごに2人が登り、他の参加者が竹の棒と太縄(綱)を持って持ち上げ、善光寺を右回りに3回回りながら次の歌を歌ったそうです。

潮来出島のよれ真菰(まこも)
殿に刈らせて我捧ぐ

ささぎ揃いて船に積む

船は何船宝船

船は出て行く森の影

此処は何処だよ船頭さん

森の下には狐棲む

棲むや白狐

我も三度騙された

(出典・八郷町史)

さて、地元の年配の方に伺いましたが、この潮来節の歌はあまり記憶にないようでした。昔は、最初の準備で竹を運ぶ時や、夜に一晚中歌い踊った歌は、次のようなものだったという話をお聞きしました。

苗代(なしろ)の水の口 お池の松は姫の松

この短い歌を一晚中歌ったといえます。この「苗代」は田んぼの水の取り入れ口のことです。豊作を願って歌われ始めたものだと思います。しかし「姫の松」とはどういうことでしょうか。地元の方のお話では女性を大切にしようか。地元の方の「だろ」ということでした。

この善光寺は小田氏に縁のある所と言われ、上のお堂の裏手には小田家のものと言われる五輪塔がたくさん並んでいます。善光寺という寺は明治半ば過ぎまで今の楼門をくぐった左手にある「田園都市センター」の場所にあったが、無住となり、御本尊と言われる高さが1寸8分(約6cm)の小さな金の阿弥陀如来像を、今の階段を上った先にある大きなお堂に移したといえます。しかし、ここも維持ができなくなり、現在は、近くの小田家の子孫と言われる家(友部さん)の土蔵に木箱に入れられ保管されています。

この小田氏もこの地に来たのは小田城主2代小田左衛門尉成治公の母堂が出家して、「太田月光山麓を安隠の地と選び、文亀元年(1501)「月光山無量寿院善光寺」を建立し、新善光寺を此処に移した」と現地説明板には書かれています。しかし、

その後小田氏の内紛が起り、この地に小田のお姫様などが逃げてきたのではないかという話もあったようです。歌に出てくる「姫の松」とも関係があると考えてみるのも楽しくなります。

さて、最初に書いたもう一つの長い歌はいわゆる「潮来節」で江戸時代に全国に広まったものの一つだろうと推測されます。でもこの歌詞もじっくり読むと大変興味が湧きます。

「潮来出島」というと、長唄や日本舞踊などで有名な「藤娘」の中に取り入れられ、全国に知られるようになった歌(潮来出島)があります。

潮来出島の真菰の中に

菖蒲(あやめ)咲くとはしおらしい

サアサよいやサア

この歌が最初に見られたのは1822年の「浮れ草」だそうですので、潮来には当時いろいろな商人たちがやってきていて花街としてもたいそう賑わったのだと思われれます。

さて、この祭りの時に歌われたという潮来節は似たものを探してみると、浮れ草よりも更に50年ほど前の、1772年に収録された歌謡集「山家鳥虫歌」に次の歌が載っています。

潮来出島のすな真菰(まこも)

殿に刈らせて我ささぐ

さつさおせおせ

1772年はまだ江戸の中期で田沼意次の時代。この時代の歌が残っていたのでしょうか。また、此処は何処だよ船頭さん

此処は神崎森の下

に出てくる神崎(こうぎき)は香取神宮のある千葉
県香取郡にある神崎神社のことであり、下総国から
常陸国へ入る入口に建てられた神社です。ナン
ジャモンジャの木があることで知られています。

ここにも数ヶ月前に行ってきたが、今でも
鬱蒼とした森があり利根川がすぐ横を流れてお
りました。江戸時代には霞ヶ浦や銚子からの水運
ではたたくさんの船が行き来した場所で見印にな
った森だったのでしよう。この神社にも次のよう
な潮来節(船頭唄)が残されています。

ここは神崎森の下

梶をよくとれ船頭どのよ

主の心と神崎の森

ナンジャモンジャで気が知れぬ

この万灯祭の歌も残っていれば、この地から材
木を切り出し、米俵を恋瀬川上流の船着場まで運
び、そこから霞ヶ浦を通って江戸へ物資が運ばれ
ていたのではないかと推測するきっかけにもなる
はずなのです。生活スタイルが変わり、昔の祭りを
継続することはかなわなくなるかもしれません
が、このような歌も残していくことも大変意義が
あることだと思います。この潮来節がその後いろ
いろ発展し、神戸(こうべ)節になり、石岡も大い
に関係のある「都々逸」に発展したのです。

裏山の善光寺(お堂)は江戸時代の築造と考えら
れますが、屋根を瓦に取り替えたためでしょうか、
一部が崩落して見るも無残な姿をさらしています。
先日見た時も、数年前に見た時より、更に崩落が
進み、今では手のつけようもない程になってしま

いました。

このようなお寺がなくなり、この地の歴史が消
えていかなないように、市でも保存方法などを検討
していただきたいと切に願っています。

「種の永続」のために(2)

菅原茂美

前号でも触れたが、人類から「争い」が絶えな
い根本理由は、人類は野生時代、自分達の生存の
ために「縄張り」を主張する習性が、いまだに抜
けきっていないからだと思う。

およそ700万年前、アフリカで類人猿から独
立して、直立2足歩行を始めたサルの軍団これが
が人類の元祖である。現在までに、発見された最
も古い人類の化石は、アフリカ中部のチャドで、
2002年7月に発見された「サヘラントロプ
ス・チャデンシス」である。チンパンジーと変わ
らぬ体格・脳容積であるが、明らかなのは、直
立二足歩行をしていたということである。

それから次々と進化を遂げ、やつと「石器」を
用いるのは、250万年前に現れた「ホモ・ハビ
リス」(脳容積650cc)からである。そして、我々現
生人類の生みの親である最後の原人「ホモ・エレ
クトゥス」が現れるのは、180万年前。その原
人から、30万年前に、我々の兄貴分として誕生し
た「ネアンデルタール人」(旧人)は、種の寿命わ
ずか27万年前、今から3万年前に滅びた。

そして今から16万年前に、我々「ホモ・サピエ
ンス」が、同じくホモ・エレクトゥスから、アフ
リカで誕生し、7万年前、生まれ故郷アフリカを

後にして、アラビア半島に進出し、更に世界各地
へと遙かなる旅路を続けた。

その後、人類に文明らしきものが芽生えたのは、
1万年前メソポタミアで初めて、狩猟採集の遊走
生活から、有用な植物を栽培し、おとなしい動物
を飼育し、「定住生活」を始めてからである。それ
ゆえ、文明と呼ばれるものが誕生して、まだわず
か1万年しか経っていない。そんな短時間で、人
類は急に、争いを避け、博愛主義に満ちた理想的
な生物種に変換など、できるわけがない。

生物は基本的に縄張り争いをして、自分の食料
を確保し、ライバルと争って生殖相手を確定し、
子孫を残してきた。その競争に負けた者は、子孫
を残すことはできなかった。人間いかに偉そうな
ことを言っても、所詮は、この束縛から逃れるこ
とはできず、食糧や埒(ねぐら)と生殖相手の確保
のため、野生の本能をむき出しに発揮したからこ
そ、現在の自分があると云わざるを得ない。

それ故、今回の中国や韓国の露骨な自己主張は、
醜くはあるが、人間の本性の忠実な表現と言えな
くもない。国際ルール上、決して承認できるもの
ではないが、こちら側も国民の生命と財産の安全
を守り、領土の保全には全力を尽くすほかない。

さて人類は今、発展途上の一生物にすぎなく、
一足飛びに、倫理や道徳上の高尚な生き物に飛躍
などできない。それでも折角大脳を膨らましたの
だから、多少は他の動物達より、少しはましな生
活態度を示す必要がある。万物の霊長と言われる
に値する態度を示さなければならぬ。世代を超
えて障害をもたらす原爆投下や枯葉剤を撒くなど、
人間のすることではない。

人間が他の動物と決定的に違う素晴らしさは、

自分の歩んだ過去を振り返り、よりよい「未来を設計」することができる点である。

盲目的に、今の今、自分だけが生き延びればよいとする低次元の態度を改め、全人類が、しかも、他の生物の生きる権利を阻害することなく、気高く生きる道を懸命に探ることこそ、今後を生きる全人類の使命と考える。

そう考えるとき、人間の愚行により絶滅の危機にあった、次の2種類の鳥類を、わが国が見事に復活させた功績は、高く評価される。

***1 アホウドリ**：学名 *Dionedea albatrus*
アホウドリは、ミズナギドリ目アホウドリ科の大型海鳥。鳥島のアホウドリは翼長^{2,4}、¹体重⁷kg。アホウドリはグライダーのように羽を広げ、時速70 kmほどで飛行。あまり羽ばたくことなく長距離を滑空するので、ゴルフで、パーより3打少ない打数をアルバトロスという。番(つがい)形成は7歳ぐらいからで、寿命(30歳)を終えるまで、分かれる事はないという。

アホウドリは、外洋の孤島で繁殖するため、人間に触れることが少なかったので人を恐れず、簡単に捕獲できたことにより、日本ではその名を、アホウドリと呼ぶが、英語でも *sooney* (ソニー) と、あだ名されている。主たる食べ物は魚・甲殻類・イカなどである。

さてアホウドリは、1933年から、鳥島で禁猟となったが、それまでに羽毛が目的で、360万羽を捕殺。49年には鳥島の噴火により、1羽も発見できず、鳥島でアホウドリは絶滅したと思われていた。しかし、51年には、同島で、2羽が発見され、以降、気象観測所により、監視と保護が続けられたが、65年、火山性群発地震により、気

象観測所を閉鎖。保護活動は休止された。しかし、76年から観測所は再開。ススキやシバの植株が行われ、土木工事により繁殖地は整備された。92年からは、模型(デゴイ)を設置、鳴き声の録音を流し、鳥を呼び寄せ繁殖に成功。同様の対策が他の島でも行われ、全島で51年には30羽しかいなかったのが、99年には1200羽、2010年には2570羽。12年には、ほぼ3000羽まで回復したと言われる。なお、1996年4月19日、アホウドリは国の特別天然記念物に指定された。長年にわたる懸命の保護活動は、世界から高く評価されている。

***2 トキ(朱鷺)**：学名 *Nipponia nippon*
コウノトリ目トキ科。雄1800g、2000g、雌1450g、1600g。体長76cm。翼開長130cm。翼の下面が朱色。サギ類は飛行時、首を折り曲げるが、トキやツルは伸ばしたまま飛ぶ。昔、東南アジアでは、ありふれた種であったが、19世紀頃までに乱獲が激しく、日本では2003年に最後の1羽(キン)が死亡し絶滅した。しかし、日本では、中国から種鳥を導入し、佐渡島で08年から人工繁殖により、12年までに91羽を放鳥に成功。10年現在、中国・韓国・日本を合わせて、個体数1814羽に復活している。

【現在の中国・韓国・日本のトキは、ミトコンドリアDNAが、0,006%しか変異はなく、渡りなどで、かなり深く交雑していたようである。】
トキは田畑を荒らすため、害鳥とされ、「生類憐みの令」の時代も「駆除」申請が出された地域もあったという。江戸時代、日本全国に広く分布していたが、明治時代食用や羽毛需要で乱獲され急速に個体数を減らした。そして1960年代、野

生の死体から有機水銀が大量に検出され、67年から保護が始まり、無農薬下の飼育が行われたが、03年10月10日最後の1羽が死亡し、日本のトキは絶滅した。しかし、12年には、人工ふ化・放鳥したトキからの2世が次々誕生し、再び野生に戻すことができ、関係者一同、やっと胸をなでおろしたと報道されている。

さて人類が、他の生物とともに、仲良く永続するために、どんな努力が必要か？

第一に食糧やエネルギーの安全確保こそ最重要であろう。生きるためには、やむなく他の種の生物を栽培・飼育し限定的に、他の種を利用することはやむを得ない。人類の強欲のために、他の種を絶滅するまでに、無制限収奪することは、厳に慎まなければならない。

そして更に、世界の紛争を防ぐためには、国連機関が絶対的権力を握り、一部突出した国の横暴を許してはいけない。真つ先に国連が手をつけなければならぬことは、いくつかの国が大量に保持する大量破壊兵器を、ただちに全面的に廃棄させることだ。

そして、近未来に緊急を要する事は、「真水の確保」である。今は、あまりピンと来ないかもしれないが、水源を外国資本に抑えられることは、行く行くは死活問題となる。場合によっては、石油よりも、真水の方が、深刻な問題となりうる。

現在、飼料の穀物生産に要する真水を含めた、日本の真水輸入量は、ダントツの世界1位で年間1.2億m³。第2位はメキシコの670億m³。ほぼ2倍である。日本の食糧自給率の低さは、こんな所にも現れ、気候変動で、食糧輸出国

の真水不足が起れば、わが国の食料安全保障は根底から崩れる。食糧自給率向上は、わが国の喫緊の課題である。党利党略で、あんな醜い政局争いをしていない場合ではない。

真水の不足は、多くの生物の存亡にかかわる。アフリカで、動物達の命がけの大移動など、テレビの映像でお馴染みのおりである。

そもそも、アフリカの類人猿であった人類の祖先が、なぜ直立二足歩行を始めたか？ それは、水不足と大きな関わりがある。

現在、アフリカ大陸は、1000万年ぐらい前から、マントルの対流により、大陸が分裂しつつある。エチオピアから、タンザニアに至る直線上を、東西真つ二つに、分裂進行中で、「アフリカ大地溝帯」を形成中である。あと数十万年すると、アフリカ東部は、インド洋に浮かぶ島々となる。

さて、この直線の西側では、大地が盛り上がり、山脈を形成し、南大西洋から蒸発した水蒸気が東に流れ、この山脈に当たり雨となり、山脈の西側は熱帯の雨林に恵まれた。半面、山脈の東側は、雨雲が山脈をあまり越えず雨は少なく、密林は枯れ、サヴァンナと化した。それまで、樹上生活をしていた我々の先祖の類人猿は、やむなく、樹上から平原に降り、最初は恐らくナツクルウオーク（前肢の指を握って歩く）で、四足歩行であったに違いない。そのうち、立ち上がり、直立二足歩行を始めた。平原には猛獣が潜み、草食獣を狙っている。人類の祖先も、絶好の獲物であったはず。そこで人類の祖先は、短い脚で平原に立ち上がり、遠くまで見通せなければ、危険を未然に察知することはできない。

この直立二足歩行が、この動物の脳を発達さ

せることになる。即ち、脊柱の真上に頭部を載せることにより、脳が膨らむ余地ができ、決定的に人類を高等動物に進化させたと言える。

【四足歩行では、重い頭部が体の前にぶら下がるため、背中から伸びた筋肉や腱で、頑丈な頭頂部はガッチリ押さえつけられる。当然脳が発展する余地は制限される。それが脊柱の上に乗つかれば、頭頂部の骨は薄く柔らかなもので済む。】

そして、人類の祖先は、体毛を失う。それが汗腺（エクリン腺）の発達を促し、長距離走を可能とする。人類は、瞬発力はあるが長距離走は苦手の動物（汗腺の発達が悪いため、体温上昇ですぐダウン）を追い回し、栄養価の高い「肉」を比較的たやすく手に入り、脳の発達を一層促進した。結論からいえば人類は、水不足という悪環境に対応して、大きな進化を遂げたのである。

このようにして、人類は脳を膨らまし、衣食住を安定的に確保し、かなり安全に生存を続けられる体制を整った。後は生存を脅かす、人工的な「くだらないもの」を、造り過ぎないことである。

くだらないものの右代表は「大量破壊兵器」である。世界各国の軍事力の統計をみると、開いた口がふさがらない。2009年現在「核弾頭」の世界保有数量は、ロシア13,000発、アメリカ9,400発、フランス300発、中国240発など9カ国で、合計23,385発である。これは、全人類を何回も絶滅させるだけの量と言われる。一発で何十万人もの人を殺害するような恐ろしい兵器を、人類は何故に、製造し、蓄えなければならぬのか？ 正に狂気の沙汰である。それゆえ私はこのように異常に膨らんだ人類の脳を「毒饅頭」と名付けている。パスカルは人類を

「神と野獣の中間にある」と言っているが、中間どころか、むしろ野獣以下である。野獣には、しつかりとしたルールがあり、相手が恭順の意を示せば、それ以上の攻撃は加えない。それを人類は、

相手を殺害するまで、歴史上、何度でも大量殺戮を繰り返してきた。一人殺せば犯罪者だが、多数を殺せば英雄である。こんなバカな行為は、人類は神様から限りなく遠い証拠である。こんなにも多くの人工物質で、あふれかえる現状の人類の文化は、本当に人類が目指す文明と言えるだろうか？ ミミッチイ物欲のために、人類は、どこまで、こんな物質文明を、押し進める気なのか？

交通関係は、環境を破壊し、無限に「高速」を追及する。経済は文明の「僕（しもべ）」であるべきなのに、世界は、何はともあれ、兎に角、経済優先。経済発展の見られない為政者は、無能呼ばわり。まるで、文明は経済の奴隷みたいである。その点、あれだけ大量の排気ガスをバラまく英仏共同開発の「コンコルド」を、退役に追いやった両国の決断は、賢明であったと私は高く評価したい。（コンコルド…1969年、マッハ2で初飛行。20機製造されたが、高額・高燃費・環境汚染などで2003年、全機退役）

人類という種が永続したいのなら、あまりにも急速に、野生を捨て、訳の分らない変な文明を繁栄し過ぎないことだ。大事なことは、環境を破壊しない程度の、ほどほどの文明を継続し、スローライフを重んじることだ。

【私は最近、とんでもない本を読んだ。人類の滅亡につながる、SFとは違う科学的な推論である。結論から言うと人類の「おす」は今から460万年後には、消えてなくなる…とのこと。

今から3億年前、恐竜など爬虫類の一部から、

バージョンアップして温血の哺乳類が生まれた。哺乳類の元祖が誕生したころは、染色体のXとYは全く同じで、雄雌の区別がなかった。しかし、環境の変化に対応するため、多くのバリエーションが求められ、最も適した者のみが、生き残るシステムが定着していく。そのために、雄というものが出現し、その決定遺伝子(SRY)はY染色体に乗る。生殖の時、減数分裂で雌雄が半分ずつ遺伝子を持ちより、中間の性質を持った新しい個体が生まれる。両親から来た相同遺伝子は、受精の際、シャッフルし、また別れる。同じ両親でも遺伝子のごちゃ混ぜで、「きょうだい」に、大きなバリエーションが生じる。そして環境に適した者のみが生き残る。

さて、その受精のあと、メスの性染色体は、Xが2本なので、例えば1本が放射能などにより障害を受けても他の健全な染色体が傷ついた箇所をすぐ修復する。しかし、オスのXY染色体のY染色体は、若し傷ついたりしたら、それを修復する相手が無い。それゆえ長年の間に、Y染色体はぼろぼろに崩れていって、現在、ヒトのY染色体は、X染色体の10分の1の長さになり、あと460万年後には、消えてなくなる計算なのだそう。

男の権力欲や闘争心が強いいためか、世に争いが絶えない。世の中、全部女性だけの世界なら戦争がなくなるかも…。DNAには根性があるので、たとえ雄がいなくなっても、何らかの方法でその生物は生き残ることは確かなようだ。現にアマミトゲネズミなど、Y染色体は消失したが、X染色体だけで、しっかり生殖が行われているという。【それにしても、生命に「永遠」はない。これまでに、地上に繁栄して無限に永続した生物はいな

い。栄枯盛衰は世の常。種によりその時間は諸々。天が与えたその有限の時間を、人類は折角脳味噌を膨らましたのだから、恥のない、納得のいくように過ごしたいものである。

寄り添い

伊東弓子

私達年代の活動が、以前よりも丁寧にゆっくりした流れで進んでいるのを感じるこの頃だ。年齢と共に人数が減っていく事はあっても停滞している訳ではない。会員同志が共通したものを持つているからだろう。夫婦の形が変わってきた事が大きいと思う。伴侶を失った人、相手が病気になる等、そんな中での活動だからだと思う。今やれる事をしていこう。集う事で力を貰える。そこに寄り添い合う力が生まれてくる。石佛を調査する会もその一つだ。石佛の像を見、知る事で佛の大きな心に触れる。年代を通して長い時の流れの中にいる自分達を感じる。風雨に晒されてきた事からその土地の人達の苦労や願いの重さを強く感じる。そういう機会に触れる事で力や優しさを受ける。ながらあくせくしないで活動出来るお蔭と思う。十月の調査の日、この時期としては陽射しの強い日だった。美野里北地区に出かけた。旧道添いに社があった。鳥居の右側に石佛が二体ある。境内は木々に覆われて丈の低い草が生えている。草深い左奥の方に東屋が見える。会員の一人の話では一寸前まで仲間達(地域の老舗とゲートボールをしていた所だった)のこと。町の方に新しいコートが出来てから其方へ行く人が多くなった。

2012 CONCERT SERIES

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。
魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。どうぞよろしくお祈りいたします。

- 11月3日 フラヴィオ・クッキ ギターリサイタル
- 11月11日 福田進一 ギターリサイタル
- 11月29日 ステファノ・グロンドーナ ギターリサイタル
- 12月9日 尾尻雅弘・角圭司 ギタージョイントコンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。

オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

それで廃れてしまったのだそうだ。車がないと遠く迄は行けず僅かな楽しみからも取り残されていく事が多々出てくると身につまされるのを感じた。社は暗さの中で静寂だ。それが荘厳、崇拜の場なのかとも思ってみた。先に行った二人が「右に寄ってみて」と声をかけている。そこには「宿り木」夫婦円満、子孫繁栄の木と、文言が記されていた。「私には関係なくなつた言葉だね」と笑っている二人。「そういえばそうね」と答えてついでにいった。何かもの淋しい言葉の余韻が漂っているようだった。

そこに杉の木(二十年位のもの)の一部から他の木が細い顔を出していた。「椿か榊か」とあれこれ騒いでいた。「榊じゃないよ。神の木がこんな事する筈がないよ」「いや怪しげな事をする神もいたんだよ。きつと」後から追いついた三人も話に加わった。「神様に願掛けしていた娘が添遂げられた証じゃないか」「道ならぬ二人がこの森で合っていた事が、神の怒りに触れて木にされたに違いない」等と皆で大声で笑い好き勝手な事を言つて、神前を貶していた。でもよく見ると杉の木の下の方の皮の一部がブアブアしている。「これは怪しいな。ここから枝を差し込んだんじゃないか。そんな事もないか、葉も生き生きしているし、兎に角、この皮確りくつつけておこう」とみんなで踏んづけ、傍にあった石を寄せておいた。「一人じゃ淋しくて杉の木に寄つていったんだらう。わたしらも同じような身の上だね」そんな会話も自然に受け答出来る年になつたのだと思う。「寄生木」と書くのも寄生虫みたいに感じる。「寄生木」がいいのか。

この木達も寄り添い合っている木と思われるも

のが身近な所にある。もう四十年以上も見て来たが、あまり意識していなかった。高崎台の畑に楓の木三本と姫林檎が一本、お爺さんが亡くなつた後友が植えた物だ。お爺さんが孫の健やかな成長を願つて、男の孫三人に三種類の楓。女の孫に姫林檎一本を盆栽で手入れをし、育てていたが、お爺さんが亡くなつた後、鉢植えの手入れが難しく出来ないのので広い畑に植えたと友から聞いた事があつた。今では三本の楓の幹はくつついて、どっしりとして枝を伸ばしている。やがて三種類の紅葉の時を迎える。その傍に姫林檎も負けじと背を伸ばして葉を沢山つけている。もうすぐ独自の色彩を見せてくれるだろう。これって、お爺さんの願いに寄り添つて根付いたのだろう。暖かい気持ちになつて通り過ぎた。

寄り添い遂げたい願いを持ち続けている二本の木が霞ヶ浦の浜辺にあつた。もう十年位前になるだろうか。御留川散策をしながら走っている時、寄り添つて立つ姿を見た。気になる所為かよく通る様になつた。その度に偶然生えた木かな。台の方から風で飛んで来た種と、波に運ばれた種がここで芽を出したのかな。砂浜で遊んでいた子供達が植えた物か。若い二人が将来を誓つて植えた木か。常緑樹と落葉樹のように見える。すてきな物語りでも出来そうで気持ちよく通る場所だ。

二本の木の姿を見るにつけ、少しづつ接近している様に見えてくる。やがて一本になるのだからかと、見果てぬ夢を追つたりもしてみる。ところが世の中には不可思議な事があるものだ。歩いてきた女の人に呼び止められて、話しが始まつた。天気の話しや世間話から霞ヶ浦の事などつきなかつた。話しの好きな人だった。この土地の人だ

と分かつて二本の木の話しを出してみた。知るも知らぬもないこの人のお姉さんに纏わる話だつたのだ。

終戦直後の貧しい暮らしの中、漁の手間、開放になつた僅かな田畑の耕しをしていた頃で、姉さんは十七だった。夏の川で「助けて」という声が出たまに得意の泳ぎで水に入つて行つた。波のまにまに漂う人を右脇に抱え浜に上げて手当てをした。若い男だったという。家に連れてきてからも眠り続け、やつと気がついたが体は弱りきつていたので、暫く家で養生していたという。体がみっしりするも手伝いもしてくれなかったが、年老いた二親がいたので帰ることになつた時の姉は大変な悲しみだつた。大井戸廻りで向う場に帰るといふ日に二人で植えた物だつた。毎日その木と向う場を見ながら、一年二年が経つていった。いつの日か迎えに来るといふ言葉を信じ、婿もとらず嫁にも行かず六十五、六年経つた。

この頃の姉は痴呆が出てすっかりおとなしくなつて言葉数も少なくなつた。毎日この二本の木を見に来る事は欠かさないし、大井戸廻り迄行つた事も何回かあつたようだ。この間は「この木がくつつく頃来るかな」と言つていたという。あと十年二本の木は一緒になるだろうか。寄り添わずに終わる事なく一度でいいから機会を与えてあげたいが、願いは叶うだろうか。

ある所で見えた物は大本が倒れて久しい姿だつた。外側は残つて中が朽ち果てていた。虫達が喰ひ、木の葉が重なり雨に湿り、新しい生命が産み出される苗床だろう。と眺めていた。木の皮の一ヶ所かと思われる所から小枝が出ている。これはこの大木の一部か、大木は何の木かわからないが細い

枝の小葉は櫟のようだ。これはこの木の再生する姿か、この木に宿って育った物かと眺めた。幹周辺の朽ちて土と化している状態の所は林のすべての木々の芽が生れ出ている。幼い双葉も林の一員として、様々な顔を持つて堂堂としている。林の中で再生あり、再再生あり、誕生あり、寄り添いあり、宿り木ありありと色々な姿を見せて貰った。

玉里の西外れの古道を創造しながらも無理に歩いてみた。つい最近の事だった。人家のある所迄は砂利など敷いてあった。その先は土の道になった。畑に行く車が通るのだろう、轍の跡があつて、その間に草が生えている。とうとう両側山林という道はもう訪れる人も、仕事をする人もなく篠が蔓草類に頼られて腰を曲げ、私の通るのを遮っていた。負けずに進む、逆に林の方が歩きやすかった。そこで見た物は美野里の社の宿り木と同じ状態の物だった。

杉の根元の皮が剥れて、根元から這い出した細い木は皮の中から中途の所へ顔を出していた。細い木はしっかり杉の木について、栄養を分け合つて育つていくのだろうか。人里から離れた林には花とは似ても似つかぬ恐ろしい蔓を持った物がある。木々を締めつけ太くなり、上へ上へと伸びて行く藤、葛は信念もなく伸び放題で広い場所を支配していく。人の手の入らない植物世界の中からやっとなつて出て「ああ、助かった」と思わず叫んでしまった。

一年前、故郷に帰られた先生の心に寄り添って仲間と石佛の会を続けていこう。そつと寄り添っていきける物を大切にしていきたい今の私。

金丸町の弁財天さま

兼平ちえい

毎年の九月、敬老の日を入れて行われる石岡のおまつりは今年も十五日からの三日間で、県内外から41万人もの観光客をお迎えすることが出来ました。華麗な山車や勇壮な幌獅子などが市内を練り歩き、石岡の街はおまつり一色に染まりました。

今年、おまつりに参加した町内は、石岡のおまつり振興協議会資料によりますと三十六町内、出し物はささら一、山車十二、そして幌獅子二十七。三日間のおまつりを華やかに、にぎやかに多に盛り上げてくれました。

その出し物の中で神輿に供奉する脇役であるにもかかわらず祭礼のシンボルとなり祭礼を一層華やかにしてくれる十二の山車にスポットをあてて見ました。今回は今年の年番町であった金丸町の山車に飾られている人形の弁財天さまです。

金丸町には以前に、(今から七、八年前)、一鈴の宮稲荷神社と天狗党について「伺ったことのある洋装店の大高様を尋ねました。

昭和三年生まれの、八十五歳。七、八年前お会いした時と全くお変わりなく、若若しさと優しい笑みで、相変わらずの、語り部さんを發揮して熱くお話ししてくれました。弁財天さまの購入先は日本橋魚市場本小田原町所有の山車で、五日五晩かけて野宿しながら石岡まで運んだそうです。それは大正十一年春のことだったそうです。

天下祭り(徳川将軍の上臈をうける祭禮の事)と称された神田明神と山王神社の祭礼に供奉した百台を超える山車は、金丸町で弁財天さまを入手した翌年、大正十二年の震災で全焼してしまつたそうです。

それより一年前に買い取られていた弁財天さまは難を逃れたということになります。

この後、東京では、もう一つの理由として、都電が張り巡らされたことで、山車の行列が出来なくなつた事も加わつて神輿の時代に転換し、山王神社、神田明神そして浅草の三社祭も出し物はすべて、神輿になつたとのことです。

東京中のお宮で供奉行列を続けてきた各町内の山車が売りに出され、金丸町の弁財天さまもこのような、東京のご時勢の変化に対応して買い求められたようです。

一般的に人形の髪は馬の尻尾でつくるそうですが、弁財天さまは髪の毛そして眉毛まで彫刻で一刀彫。毛はどこにも使っていない人形としては日本でもめずらしいもので、町内のご自慢だそうです。「見れば見るほど男心をそそる美形である」と云われて、大正、昭和、平成と三時代の石岡に華やかさとやさしいまなざしをそそぎ続ける日本橋生まれの弁財天さま、これからも石岡のおまつりを更に彩ってくれるでしょう。そして語り部の大高様の益々のご活躍をお祈りしています。

・ 網ほおずき 日だまりにひとり
・ カサ コソ 裏磐梯 ちえい

《ふり》

アライン・書道・書道会館のついでです。

(キター文化館通り)

看板娘(大)「うらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

TEL 020-43-0000

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光（3・4）

そもそも東北地方の一領地に過ぎない和賀地方のことが、なぜ取り上げられるのか？と言え、既に述べたように、此の地方が優れた馬の産地であったからで、頼朝の命を受けた南部光行が甲斐駒の技術を以て南部馬の育成に当ったことは知られている。その成果が上がり、丁度、筑波山麓に居た小幡氏が鎌倉の馬鹿公方に領地を取り上げられたことが発端で起こった「上杉禪秀の乱（石岡自慢の大掾氏没落の原因）」の頃に、南部氏は名馬百頭を京都の将軍に献じている。

もう一つ、和賀の自慢と言え、領主・和賀氏が源頼朝の血筋を引く豪族であったと主張していたことである。和賀氏の家系がそれを伝えていたらしいけれども、既に述べたように内容に怪しい点があり、また鎌倉幕府が滅亡して、いわゆる下克上の風潮が濃くなってくると「源頼朝の子孫」などという切り札も、その辺の稻荷神社のお札ぐらいいし価値が無くなってくる。

この一族は南北朝時代から戦国時代にかけて近隣の豪族と闘争を繰り返して何とか豊臣秀吉の時代まで頑張っていた。鎌倉幕府の滅亡後に和賀氏に影響したと思われる岩手、山形、秋田、宮城方面の戦国大名は、和賀氏と同様に中小企業の武士団であったろう。特に南北朝時代は後醍醐天皇一辺倒の北畠親房の息子達が東北方面を足場にして「不利な体勢を挽回しよう」と焦っていたから、どの武士団も南だとか北だとか、団地探しのよう

に振り回されたことが想像される。

和賀系図によると、謎だらけで和賀氏を継承したのが忠頼で、其の子は忠明、忠明には三人の男子があり、嫡男が宗親、以後は忠義から九代続いて鬼柳、煤孫（すすまご）、獨澤（ひとりざわ）、遠澤、八重樫、成島、関口、稗貫（ひえぬき）、中館などの支流が出来る。それらが本宗の和賀氏を中心に纏まり、一族として結集していた。

一般に関東、東海から近畿、中国、四国、九州にかけては戦国時代に活躍した大勢の武将が知られているけれども、東北地方に関しては伊達政宗ぐらいしか思い起こせない。戦国時代後期の東北地方は大雑把に言って会津に桓武平氏（平良望系・三浦氏）の葦名氏が居り、北条氏康や武田信玄、近江の浅井氏などと結んで勢力を伸ばした。出羽国・山形には清和源氏・足利支流の最上氏が地方官として赴任した土地に土着しており、織田信長に誼を通じるなど勢力の拡大に努めていた。さらに岩城（磐城）国には、第四章前編で触れた石岡に所縁のある桓武平氏国香流（大掾氏と同じく平繁盛を祖先とする）岩城氏が居た。そして天正十二年（一五八四）十月、米沢城では伊達輝宗が嫡男の政宗に家督を譲った。この十八歳の若者が奥州全土を掻き回すことになる。

そうした中で天正十八年三月には、関東・東北の中小武士団にとって思いもかけない事態が生じることになる。豊臣秀吉が小田原の後北条氏を攻略するため二十五万の大軍を擁して攻め寄せたのである。先鋒を務めるのが徳川家康で、四月三日には秀吉が小田原に到着している。此の時に常陸国では水戸の佐竹氏が北条と対立し、伊達政宗は北条に付いていたと言われる。伊達軍と睨み合う

佐竹は動け無い。しかし佐竹義重に親しい石田三成が「豊臣軍圧勝の予定」を知らせて来たので、佐竹を継いだばかりの少年・義宣は父親と相談して急いで尻尾を振り直した。伊達政宗も仕方なく秀吉に表面だけ従う決心をしたらしい。

関西人の秀吉は関東を知らない。一方、関東・東北の中小武士団でも、現物を見ていないから「豊臣秀吉」のことを絵本の中の孫悟空ぐらいにしか理解していない。秀吉は小田原攻めに際して関東・東北の中小武士団に「小田原まで出て来い！」と命令をした。知らないオジサンに声をかけられても、ノコノコついて行くな！と子供の頃から教え込まれていた地方の武士たちは困った。

常陸国内では、石岡で中途半端な家柄だけに頼って没落したことが自覚出来ない大掾氏などが「どうしようか？」迷っていた。選挙の候補者と同じで、自分の人氣が今一つパツとしないことに気付いた秀吉は佐竹義宣を呼び「常陸国内はお前に任せる」と言った。感激した兄ちゃんは、その気になって小田原へ行かなかった武士団を手当たり次第に攻め滅ぼした。単細胞は恐ろしい。

東北地方では武士団の対応が分れた。まず太閤秀吉の全てを把握していた岩城氏が真っ先に小田原へ行った。面白いことに、この家の家臣が木下藤吉郎時代の秀吉を知っていたのである。その為に継嗣が絶えても、秀吉の指示で佐竹から養子を迎え家系が存続できた。葦名氏は佐竹に攻められ、会社で言えば吸収合併をさせられたらしい。秀吉は葦名の後を近江出身の蒲生氏郷に与えた。織田信長の許で人質になっていたが、信長に見込まれてその娘を妻にしたと言われ、秀吉にも気に入られた人物である。

岩城氏に続いて松前、津軽、秋田、南部、六郷、小野寺、戸沢、安東、相馬、田村などの諸氏と由利党など近辺の中小武士団も、それぞれの事情を抱えながら積極的に、或いは仕方なしに洪々と、小田原へ行って領地を安堵された。

山形の最上氏は遅刻して危ういところを親しかつた徳川家康に取り成して貰って滑り込みセーフの状態だった。豊臣秀吉が小田原城を落とす直前まで伊達政宗と最上義光の二人は激しい骨肉の争いを展開している最中であり、さらに義光は父親が危篤状態であった。父親は良いタイミングで死亡したらしいが合戦は相手がある。最上と徳川とは源氏の同族になるらしく、最上の行く末を案じた家康が義光に「休戦・小田原行き」を示唆したのである。伊達政宗の母親は最上氏の息女とされており義光と政宗は伯父甥か従兄弟同士である。親戚の両氏が東北地方に居る訳であるから困難に直面した時代には都合が良かったろうに：などと考えるのは現代だからかも知れない。

さて、ここで問題なのが伊達政宗である。秀吉と政宗は六、七年前から知り合いの仲であった。織田信長が健在だった頃に父親の伊達輝宗が政宗を連れて上京し、それ以来の付き合いがあったのだが、奥州征覇を夢見る政宗は、秀吉の和平提案にも耳を貸さず、周辺への侵攻を止めようとしなかった。そして天正十七年には会津を攻めて葦名氏を追い払ったから秀吉でなくても怒る。政宗は秀吉に使者を向けて「侵略の釈明」をしている。伊達政宗という人物は、現代ならば「マッチポンプ」と呼ばれる性格のようで、余計なことを仕出かしては言い訳したり、後始末をしたりする。此の場合も「小田原行き」の督促をうけながら、

それを無視していたらしい。それを通せば骨の有る人物になるのだが、土壇場になって自分の意思をコロッと変える。それも芝居がかった手を使うから何とも嫌らしい。政宗はぎりぎりまで行かずに、わざと遠回りをして小田原に着いた。秀吉は怒り、箱根山中に閉じ込めたいらしい。それを何とか屁理屈をつけて謝り、勘弁をして貰った。ただ多くの領地を削られたらしい。なお、歴史上の武将に「伊達政宗」は二人居るので念のため：伊達氏は既に述べたように茨城県下館地方の伊佐荘を治めた豪族・常陸入道念西（伊佐朝宗）が、頼朝の奥州征伐で手柄を立て、御褒美に陸奥国伊達郡を貰ってから伊達氏を名乗ったのである。その中興の祖に「伊達儀山（政宗）」が居り、お騒がせの政宗は、その先祖の名前を貰ったと言われる。

後に関ヶ原合戦でミスをした上杉氏は、未だ謙信以来の越後に居て、百二十万石で会津若松へ来るのは秀吉が死んだ慶長三年である。東北地方では伊達政宗が一番遅く小田原へ来たことになる。残る葛西、大崎、白河、石川、九戸などの中小企業武士は小田原へ行かなかった。多分、当時の世情に疎くて、織田信長の家来に「猿」がいたことは知っていたが、そいつから呼び出される謂れはない！そう考えたのかも知れないが、前後の事情を考えると、伊達政宗が背後で糸を引いて行かせ無かったことも考えられる。

石岡の大掾氏のように「脱小田原」を宣言したような武士団は、名門であろうが迷門であろうが容赦なく潰されたので、東北地方で「ささやかな抵抗」をした葛西氏などの諸家も、それぞれ由緒ある戦国大名であった。大掾氏は桓武平氏傍流の末流のまた末流に過ぎなかったが、葛西・大崎両

氏などは奥羽地方を管轄した「留守職」「探題」の直系であり、石川氏は清和源氏、結城氏は茨城県結城に因む藤原系豪族で徳川家康が自分の子に継がせた家柄である：で、イエガラもトリガラも無い！と思えば良いのだが豊臣秀吉に、鶏のように簡単に始末された大名の中には、これまで長々と説明してきた源頼朝の後胤と称する和賀氏と、その支流と思われる稗貫氏」が居たのである。

稗貫氏は省略するとして「源頼朝の子である」と自分で言い出した和賀忠頼から数えて十二代目か十三代目かの「和賀又次郎義忠」が小田原行きの切符を買わなかった本人である。名前に飾りの官職名が付いていないから、宣伝下手と言うか戦国時代を生きる武士団の主としては消極的な人物であったのかも知れない。そういうお客さんが居ると日本統一も楽になるので、秀吉は葛西、大崎、和賀氏らの領地を没収して木村某という武将に統治させた。この木村という人物は、織田信長を討つた明智光秀の部下で身分も低かったのに、どういふ訳か秀吉に気に入られていたらしい。或いは「本能寺の変」の裏の仕事？を担当したのかも知れない。明智光秀は天海僧正説と合わせて、その辺りを追及すると面白そうだが：とにかく木村某は統治能力どころか人間性も無いような人物で、秀吉から任された侵略領地に勝手放題に君臨して領民を苦しめたのである。

秀吉は、奥羽地方を征服する際に「スーパーの特売」を真似たらしく「先着〇〇名様」を大名として認め、遅れて来たり、店を覗いただけの客は領地を没収した。しかし抵抗さえしなければ自分の統治下でアルバイトぐらいには採用しても良いと思っていたようである。ところが無能な木村某

は足軽程度から大名になったので、傲慢だけが先行して自分に取り入る者だけを受け入れた。足軽以下の中間小者（ちゅうげんこもの）を武士に採用して任務を与えたらしく、領内には非道がはびこり、過酷な政治が罷り通るようになった。

当然の結果として領内に反乱が起こり、領主の身が危うくなつたため、秀吉は東北に駐在していた浅野長政（本松）、伊達政宗（米沢）、蒲生氏郷（会津）の三将に出陣をさせた。此の時に政宗は米沢を出て白石に着き、会津若松から来る氏郷に対して「出兵を止めて暫く様子を見るように…」申し入れた。氏郷はそれに従うつもりで居たところ徳川家康が独自に榊原康政や結城秀康を出陣させたことを知って政宗の言動に疑いを持ち、大雪の中を葛西領（宮城県北の東部）、大崎領（宮城県北の西部）に進軍して救援作戦に成功した。なお木村某は失脚し、領地は氏郷に与えられた。

氏郷は政宗の不可解な言動を秀吉に知らせるとともに自ら京都に赴いて「伊達政宗にご用心！」を進言したので、秀吉は政宗を召喚して詰問することにした。政宗は田舎芝居並みに「金張り十字架」を背負つて秀吉の前に現れ、例に依つて陳謝をしたり、あれこれと弁解をして罪を許された。秀吉も「金キラ」に誤魔化された：史書によつては政宗の行動が誤解されたように書いてあるが普通に考えれば何かを企んでいたと思えない。これが天正十九年（一五九二）の一月から二月にかけてのことである。なお茶道の千利休が切腹させられたのもその頃であるらしい。

金の十字架のお蔭で許された伊達政宗は不起訴ということになり、「お騒がせ料」として会津近辺に残っていた領地を没収された。会津本領は既に

若松城の蒲生氏が押さえている。政宗が代わりに貰つたのが一揆の起こつた葛西、大崎領であり、政宗にしてみれば蒲生氏郷が憎くて当然である。宮城県北に移された伊達氏はやがて徳川家康によつて周辺の領地を増やして貰い、仙台を拠点とすることにるのである。政宗を「腹に一物ある人物：」と見た蒲生氏郷の目は確かだつたと思う。

氏郷は数年後に謎の死を遂げる。謎であるから暗殺された疑いもある。此の人も、平将門を追討した藤原秀郷の子孫とされるので、既に述べたように祖先の因果で運が良くなつたのであろうか。蒲生氏郷のような人物とは正反対に、馬鹿を百%發揮した木村某に懲りた秀吉は、自分の甥で後継者に据えた豊臣秀次を総大将に、蒲生、佐竹、宇都宮、上杉、徳川、大谷、石田、浅野らの諸将を

反乱鎮圧に派遣した。奥羽地方の反乱によつて「天下人」の名譽心を痛く傷付けられた秀吉は「反乱者を撫で斬りにせよ」と命じ、それを受けた秀次が残酷な性格であつたから反乱者側と看做された者は女子供まで酷く殺されてしまった。尤もその秀次は、間もなく淀君に秀頼が誕生したことによつて閑白の地位を脅かされ、疑心暗鬼から乱行を重ねたとして秀吉に自刃させられ大勢居た妻子も処刑される。これも愚かな上に因果応報の見本のような人物である。

秀次の妻妾、それも公家の姫など選び抜かれた美人ばかり三十数名と、生まれた男児三人、女児二人は文禄四年（一五九五）八月二日、三条河原に設置された臨時処刑場に運ばれ、石田三成、増田長盛の両武將が検分し、三百名の武士が警護する中で名簿に合わせて次々と斬られた。こちらは反乱でも暴動でも無く、豊臣秀次に見つけ出されて

側室などに据えられたことが罪になった。遺体は掘られた大穴に放り込まれ、墓地の建立など許されなかつた。この残酷な行為は秀頼の行く末を案じた秀吉の命令とされるが、俗説では石田三成の進言で淀君が命じたとも伝えられる。誰で有ろうと許される所業では無い、

犠牲者の中には小田原へ滑り込んで没落を免れた最上義光の娘（駒姫）も居た。反乱鎮圧に来た秀次を山形城に招いて御馳走をしたのだが、その際に十四歳だった駒姫に給仕をさせた。才気が容姿に現れ可憐な姿の駒姫を見た秀次は義光を説得して都へ連れ帰り側室にした。かつて筑波山麓の多氣城に源頼義が泊まつた際に、多氣大掾宗幹の娘が酌をしたばかりに閨の相手をさせられ、生まれた娘が「後三年の役」の発端になつた例を紹介した。駒姫の場合は大きな合戦を誘発した訳ではないが理由も無く首を斬られた。

状況を知つた義光は、徳川家康に頼んで駒姫の助命を嘆願したが秀吉は頑として聞かなかつた。それどころか、此の時に義光も伊達政宗も秀次の取り巻きたと思われて監禁されたらしく、石田三成が厳しく追及をしたようである。これを助けたのも家康とされる。淀君に秀頼が生まれる迄は、秀吉の後継者として馬鹿でも阿呆でも有望株であつたから最上も伊達も秀次に接近していた。その相手が一夜にして重罪人になつたのであるから、奥羽地方のエースであつた最上、伊達の両家は消えて無くなる予定であつた。二人が助かつたのは高校受験の「滑り止め」のように、徳川家康にも誼（よしみ）を通じていたからである。

三条河原の大虐殺で秀頼の将来を明るくした秀吉は、翌年（慶長元年）から狂気のレベルを上げて

再度の朝鮮半島出兵を企てた。加藤清正、藤堂高虎、毛利秀元、加藤嘉明、蜂須賀家政、小早川秀秋などの諸將が現地でも苦戦を強いられたいが、良い塩梅に慶長三年（一五九八）八月に秀吉が死亡し、徳川家康が諸將の引き上げを命じた。秀吉が最初に朝鮮出兵を行ったのは東北地方の反乱が一応は終結した直後である。秀吉の意向に基づく総大将・豊臣秀次の「反乱者撫で斬り（無差別大虐殺）」で気持ち沈んでいた武將たちは、息つく暇も無く見たことも無い朝鮮半島へ行かされ今度は自分たちが異国で撫で斬りにされるかも知れない立場に置かれたのである。それを二度も経験させられたから、家康の引き上げ命令は嬉しかった。秀吉の「狂気の沙汰」を忠実に実行したのは石田三成であるから評判は悪い。関ヶ原合戦で家康が勝つのは当然の結果なのであろう。

豊臣秀次が失脚した年に伊達政宗は浅野幸長と共に第一次出兵で朝鮮半島に居た。秀吉の寵臣であつた蒲生氏郷が病死して、奥羽地方が不安定になつたので秀吉は政宗に帰国を命じた。ところが秀次の事件で神経を尖らせた秀吉は、日頃から秀次にも尻尾を振っていた政宗を疑い出した。慌てた政宗は秀吉の取り巻きに事実無根であることを釈明したが秀吉の疑いは解けず、政宗に「：豊臣秀頼が生まれた際に、其の方が嫡男・秀宗を連れて挨拶に来た。それに免じて伊達の家は秀宗に継がせるように：そなたは遠方に行け：」と伊予宇和島へ行くように言った。伊達の家臣たちは憤然として大坂で一戦する態勢を整え始めたから大騒ぎになつてしまつた。

この場合も助けてくれたのは徳川家康である。疑心暗鬼になつている秀吉に意見を言つても無駄

なので、家康は一枚の掲示板に「伊達政宗が太閤殿下を討ち奉る謀議の段：」として適当な暗殺計画を書き連ね、それを秀吉の居館の前に堂々と建てさせた。それを見た秀吉は、政宗に対する悪意に満ちた文面に騙され「：これは政宗を憎く思う者が居て反逆の噂も中傷であろう：」と許してくれた。結局、宇和島は伊達秀宗が貰うことになり、幕末まで十萬石の藩として存続し明治新政府の要職に就いた伊達宗城（たてむねなり）を出した。

秀吉もそうだが、特に家康は「一癖有りそんな人物」と知りながら伊達政宗の人物を高く評価して上手に使いこなしたようである。関ヶ原の合戦では石田三成に同調した上杉景勝を抑えるように命じた。その頃、政宗は景勝と小競り合いを繰り返していたから「渡りに船」と喜んで上杉領に攻め込んだ。仕事のやり過ぎにストンプがかつたと思われるが、任務は果たしている。

その後は最上勢に加勢をして戦つたけれども、何となく火事場泥棒のような行動を疑われたため関ヶ原合戦の勤務評定では東軍（家康方）に属した武將の中で伊達政宗だけが良くなかつた。攻め取つた白石は貰つたが、他の武將に比べれば恩賞が「ゼロ回答」に近かつた。ここは不貞腐れるか文句を云い募るかする場面だが、政宗は違つた。不平も言わず、愚痴もこぼさず、入社式に出た新入社員のように神妙な態度を保持し続けた。それも五、六年に亘つてである。

その間に徳川家康は豊臣秀頼を立てながら秀吉の後を継ぐ人物として着々と地盤を固め、自ら征夷大將軍となつて孫娘の千姫を秀頼に嫁がせた。大阪夏・冬の陣は未だ始まつて居らず、豊臣方でも多くの武將を集めていたから伊達政宗も徳川か

豊臣かの選択は出来る訳であるが、政宗は家康に従う態度を変えなかつた。慶長十一年（一六〇六）二月八日、家康は政宗の屋敷を訪れ政宗と次男伊達藩相続者 忠宗それぞれに名刀を与えた。そして関ヶ原合戦で「どうして良いか分からず」ウロウロしていただけの佐竹氏が持つていた龍ヶ崎の領地を政宗に呉れた。以来、明治維新の廃藩置県まで龍ヶ崎市は仙台領であつた。面白いことに、政宗が貰つたときの領地の面積はどのくらいなのか分からなかつたらしい。常陸の国は、秀吉に大粒のゴマを播つた佐竹氏が、仕置つまり生殺与奪の権を得て江戸（水戸）、大塚（石岡）、小田、菅谷（土浦）、相馬（守谷）などの各氏を勝手に滅ぼし、その後を頂いた訳であるから領地も井（どんぶり）勘定で持つていたのかも知れない。

常陸の国に広がっていた桓武平氏の高望流は、本流の貞盛が都に行つてしまつたため弟の繁盛が伝えた大塚氏が広大な領地を支配していた。これを北条氏、八田（小田）氏らの陰謀に乗せられた源頼朝が潰してしまつたから、支流の支流になる馬場氏が頂くことになり、石岡に居た大塚氏を中心に一族が行方、鹿島に広がつていて、その数は十三三館と言われた。佐竹は、その城主たちも謀殺したので、常陸国内の大部分が佐竹領になつていたようなものである。家康は慶長七年（一六〇二）に、さりげない転勤命令一本で佐竹氏を雪国の秋田へ飛ばしていたのである。

豊臣秀吉の威光を笠にして常陸国内では「したい放題」の侵略を繰り返していた佐竹氏であるが、徳川家康に対して反抗的な態度を見せていた訳ではない。日本外史には「：佐竹義宣、両端を觀望し、陰（ひそか）に梟將（きょうしょう）・車猛虎（くる

またけとら「勇猛な佐竹の武將を遣わし兵を率いて景勝を救わしむ」とあるから、伊達政宗に攻められる上杉を内緒で助けながら、様子を見ていたのであろう。徳川方に対しては「何もしなかった」のである。この点が「常に何かを仕出かしている」：伊達政宗とは違う。

慶長十二年の春に、家康の側室中で「才色兼備かつ男勝り」として知られた「お勝の方」が女の子を生んだ。どうでも良いことだが家康は六十五六にはなっていた筈である。生まれた女兒は市姫（いちひめ）と名付けられた。家康は誕生と同時に市姫を伊達忠宗の奥方と定めて婚約をさせた。ところが、市姫は四歳で死んでしまった。生まれたのは江戸城内であるが、家康が江戸を秀忠に任せて浜松へ隠居するため、お勝の方と駿府城に移った後である。市姫は、家康の祖母が眠る寺に埋葬されたといわれる。

数多くの側室の中で、大阪冬の陣と夏の陣に戦場まで家康に従った女性はお勝の方だけである。それも冬の陣には騎馬で随行したと言われるから真の「女丈夫」であるが、市姫を失った悲しみは大きく涙にくれる日々であった。それを案じた家康は、上杉氏と北条氏の血を引く「お万の方」が生んだ二人の男児のうち、弟の鶴千代をお勝の方の養子にするように命じた。七歳になった鶴千代は水戸に封ぜられ、徳川頼房と呼ばれた。旅好きな人物にされてしまった水戸黄門の父親である。

徳川家康の晩年に生まれた男児・三人が「徳川御三家」として尾張、紀伊、水戸に封じられたのだが、尾張と紀伊が大納言であるのに水戸は中納言に留まり、禄高もかなり少ない。三十五万石と言っているが、実際には二十九万石しかないのに

無理して検地の仕直して増やしたらしい。この違いは水戸に封ぜられた頼房が三男坊であったから：などと単純に決めつけているかも知れないが、果たしてそうであろうか？尾張に封ぜられた義直の生母（お亀の方）は石清水八幡宮に関わりのある山伏の娘であったと言われる。それに対して頼宣（紀伊）と頼房（水戸）の生母・お万の方は里見八犬伝のモデルとなった清和源氏系豪族・里見氏と、滅亡したとはいえ北条の血をひいている。

自尊心の強い家康が、そのお万の方が生んだ二人の男児に格付けで差を付ける筈が無い。どうして水戸藩の頼房だけが差別をされたのか：それは如何にも家康らしい拘りで頼房がお勝の方の養子になったからであろう。お勝の方については父親が太田道灌の子孫で、母親がテレビでお馴染みの「遠山の金さん」の先祖で北条氏の養女になったとする説と、石岡に居た大掾氏が失った水戸城の新たな城主になった江戸但馬守の娘で太田氏の養女になったとする説がある。いずれにしても優れた女性であったらしいから、もし市姫が伊達家に嫁いだとすれば、政宗が夢に描いていた「伊達家百万石の大藩」が実現していたと思われる。

また伊達政宗に関係は無いのだが、後に水戸藩だけが（支藩を含めて）江戸詰めとなり参勤交代の対象外とされたのもお勝の方の影響だと思ふ。二代将軍・秀忠と正室のお江の方は「三代将軍に家光では無く弟の忠長を」と思っていた。それを察した乳母の春日の局が浜松城に大御所・家康を訪ねて「家光様に」と懇願した話が知られているけれども、一乳母が「江戸から来ました」と家康に面会が出来る訳が無い。お勝の方の取次と助言があったから家光は將軍になれたので春日の局は、

それを幼い頃から家光に言い続けてきた。その為

に將軍になった家光が参勤交代を決める際に「お勝の方への恩返し」として水戸藩だけを除外した

：と私は思っているのだが…。

市姫が幼くして没したので、家康は代わりに池田輝政の娘を自分の養女にして忠宗に嫁がせた。

この女性は血縁的には家康の孫になる。そして政宗の娘を忠輝（家康六男）の夫人とするなど、家康は政宗との繋がりに気を使っている。油断のならない政宗を、家康はなぜ近づけたのか？当人しか

分からない謎だが、当時の状況から推測できることは、東国に根を張った上杉、佐竹などへの牽制である。佐竹義宣は関ヶ原合戦の後に迷いに迷った挙句、江戸に来る徳川秀忠を品川に出迎えて罪を謝し降伏の意を伝えた。秀忠は「自分で伏見に行き、家康公に謝った方が良い」と忠告した。

義宣は、その通りにしたが家康は許さず「時に乗じて事を挙ぐるは英雄の常なり。深く咎むるに足りず。独り両端を觀望する者は、鄙（いや）しむ可きの甚しきなり。故に吾れ義宣を憎むこと景勝に過ぐ」（日本外史）と言った。結局、佐竹と上杉とは大幅減封の上、許されたのであるが、ここに挙げた家康の言「…時に乗じて事を挙ぐるは英雄の常なり…」は、伊達政宗を指して言っていたように思われる。油断はならないが、どこか見どころがあるから、手なずけて見よう：と思っていたのかも知れない。

佐竹同様に上杉氏が領していた会津百万石は没

収され米沢三十万石に移された。多分、百万石は

伊達政宗に与えられる筈であったが、その頃に或

る疑惑が家康の耳に入った。何年か前のことだが

それが解明されると、伊達氏は百万石どころか良

くても佐竹、上杉と同じような目に遭う。政宗は必死で隠蔽を図り、辛うじて家康の疑惑を逸らして厚遇を受ける身になった。その秘密とは…。

(続く)

【風の談話室】

いしまでこの暑さが続くのだ、とうんざりしていたのであったが、気付くともう晩秋。楓や鳥が色づき、山を綺麗に粧ってくれている。庭の雑草たちも枯れてきて、冬支度を始めている。もう一年が過ぎるのである。

日の移ろいを早く思うようになったら、それはもう老人なのだぞうだ。

「やれやれ」がどんどん繋がって行く。

十月の半ば、鈴木健兄より原稿が届いた。そしてこんなお手紙が入っていた。

「茨城の縄文語地名の連載は、勝手ながらこの10回を持って一応一区切りとさせていただきます」読んで華やかさのある内容ではないが、小生は楽しみに読んでいたし、ことは座の物語創りに大いに役立たせていただいたので、聊か残念に思っている。しかし、こうした研究文は勝手な想像で書くわけには行かないので、こちらが期待するよう毎月月、定期便のように書き上げることは大変な事だろうと思う。

鈴木兄には、少し休憩をはさんでいただきまた復活させていただけるところを個人的には強く希望するものである。

この風の談話室には美浦村は陸平を「ヨイショ」する

会の皆様に「ヨイショ広場」のコーナーを当会報の編集局が勝手に設けさせて頂き、まる一年が過ぎました。ヨイショの会の田島早苗さんには毎月「投稿を頂き大層嬉しく感謝いたしております。今後とも長くお付き合い頂けることを念じております。」

今年も来月号で終わり、また一二年寄る事になってしまいます。会員の平均年齢も一二年寄るな、と思っていたら、当会のホームページをお手伝いいただいております。木村進さんが、今月から入会頂きました。これで風の会の平均年齢が、昨年よりわずかに下がる事になり、思わず万歳を。

平均年齢六十歳を目標にしておりますが、なにせもともとの会員が平均年齢を引き上げているので、この際中学・高校生に入会いただけるよう働きかけていかなければと、頭を捻っている所である。

《ヨイショ広場》(陸平をヨイショする会)

七十二候に七十二相

市川紀行

縄文陸平を舞台に恒例の「縄文ムラまつり」が行われ、いろいろな催しと人出で賑わった。かかしコンテストではわが「よいしよする会」の大型かかし「縄文の女神」がグランプリであった。

私は催しをはなれて送迎車が発着する近くの大樹の下に「東海第二原発廃炉署名」の看板を立てて「開店」し多くの人に囲まれていた。ふとそこに懐かしいお顔が現れた。白井さんと朗読舞の小林幸枝さんだった。おふたりは笑顔でサインしてくれた後、じゃあひとまわりと会場に去られた。

そのとき手渡してくれたのがきれいな小本、「ふるりの七十二候に 一行の呟いて七十二相」である。兼平ちえこさんの「絵」と相まって表紙からして心ひかれる。ページを繰れば白井さんの詩文は勿論だが、兼平さんの相絵のなんと心にくきこと。ことばが先か、絵が先か、詩のイメージを補うというよりむしろ膨らませてさえいるものもある。「白井さんうれしいね」とこちらまであったかい微笑に包まれる。

・ 風がやって来て立ちどまった三叉路

・ しぐるる雪にしぐれて一人

白井さんの文体には白井啓治流のユニークさがある。長文には意味と言説を明確に伝える響きの高さと、時にはアグレッシヴなつよさがある。朗読舞の語り文には言葉の美しさを意識的にひろげるかたちがある。そしてこのたびの一行詩群。これまでの映画演劇等の経験の賜物だろう。どれもすばらしいが、この作品集を改めて手にすると、この一行詩に硬い言葉で恐縮だが芸術的、生活的、倫理的、存在論的すべての姿が、いわば白井啓治の本質が抽象され象徴されて詰まっているように思える。つまりはこうだ。愉快といえば愉快である。悲しいといえば悲しい。透明といえば透き通っている。声を聞けば聞こえる。ことばがなくても見える。一行の向こうに啓示がある。収録された七十二詩群のほかに数知れぬ啓示を秘めた作品たちのねむりがあるだろう。

・ 水仙のまだ寒いと笑顔の無く

・雑木林を抜けると春がいた

菜の花の風を黄色く塗った

・虚しさを思ったら涙を流せと春の風のいう

・しぐれ道声するもさみしただ一人

勝手なことを言えばそこにはわたしの少年時が
いる、青春時がある。いやいや今のじぶんもいる。
読む人それぞれの思いがかくれて現れる。

・秋の老いて酒の美味くなる

・歩いてても歩いてても先の見えず木枯らしの吹く

「分け入っても分け入っても」と山頭火を思っ
たのも勝手だ。作者は織り込み済みで歌っている。
その魔法に浸れるうれしさよ。豊かさよ。

・せんべい布団一緒に暖める人もなく

こうしていると限りなく全ての作品を書いてし
まいそうだ。それぐらい心にしみ温まる一行詩群
である。この作品を手にとって行く秋を味わいた
いと思えばかり。もうすぐ冬になる。

・しぐるる里の年の暮れて行き暮れて

新しい出会い

柏木久美子

先日ヒロ爺とクラリネット奏者の橋爪恵一さん
宅に打ち合わせに行ってきました。

橋爪さんとは9月のコンサートでお目にかかり
ました。奥様のえりこさんがヒロ爺と古いおつき
あいのある方とのことで、うわさはお聞きしてい
ました。

ご夫婦で取り組んでいらつしやる復興支援に共
感して私も協力しようと思えました。ちょうど、
9月の末に津波の被害にあった南三陸町へ行つて
きたばかりだったのも縁かもしれません。

その時の事、一寸手抜きして夫の学校のホーム
ページから抜粋させてもらいます。

「東日本大震災の被災地の現状」(東京都立城東高校
城東高校校長の小峯健治です。私は9月27日
(木)から30日(日)まで宮城県南三陸町・気仙
沼市、岩手県陸前高田市、そして福島県を訪れま
した。ここでは、南三陸町を紹介します。

この町では「南三陸さんさん商店街」を訪れま
した。プレハブではありませんが、食堂や八百屋な
どの日常生活物資から用品店やお土産物店など
の観光客向けの店まで設置されておりました。あ
る洋品店の店主は、『皆さんが来てくれて、励まし
てくれるので、心強いです。』と話しておりました。

翌日、宿泊したホテルで毎朝運行している「語
り部バス」を申し込み、乗車しました。町の中心
部であったところでは、住宅の土台しか残ってい
ない宅地、車はとも思われない車の残骸回収場
も数か所ありましたし、病院や消防署など、建物
の解体が終わった場所は説明されないと分からな

い場所もありました。何より、最後まで、住民の
避難を呼びかけた防災対策本部(4階建て)は、
骨格しか残っておりませんでした。ご存知のよう
に最後まで避難を呼びかけ、その放送を聞いて避
難し、助かった人もおりました。32名もの尊い命
が失われた建物であり、1階の入口であった場所
には、祭壇が設けられ多くの人がお線香をあげて
おりました。

小雨の中、ボランティア活動するグループも見
られましたし、港周辺には、流されたり、解体さ
れたりした「がれき」が山積みとなっておりまし
た。『これでも半分程度になったんですよ』と語り
手は説明されておりました。まだまだ復興途上に
ある、復興したとは言いがたい状況、厳しい状況で
ありました。

また、福島県では除染を行っている住宅があり
ましたが、数人での作業、半日以上かかるのと
とで、まだまだ時間がかかりそうです。

このように、宿泊災害体験活動を終えて、改め
て、東日本大震災を考えてみようと思ひ、被災地
を訪れましたが、『東日本大震災があったことを忘
れないで欲しい、ということが今、一番望むこと
です』と言っていた語り手の言葉は、私の心に強
く残りました。

風化させてはいけなしいし、忘れてはいけなしい、
そして、次に起こる大震災ではしつかりと「自助・
共助・公助」ができる体制、体験を積み重ねてお
く必要があることを痛感いたしました。

橋爪さんの奥様のえりこさんが、東北復興支援
活動として「できることをできるだけ」プロジェ
クトを進めておられ、その中で「宮城県石巻市の

津波に遭った着物で震災の記憶、原発NO「伝える」活動」ちくちくきもの5×5のタペストリー作りと、着物をリメイクした舞台衣装のリースをし、その収益を支援活動に充てています。

ことば座の12月公演では、私もリメイクした舞台衣装を着て、橋爪さんのクラリネットで舞を舞いたいと思っています。また、美浦バレエ同好会も被災着物地を使ったタペストリー作りをして、ことば座の舞台に装美の一つとして掲げて貰います。

色々な思いを込めて、小林さんともクラリネットの伴奏で舞います。12月の共演が楽しみです。どうぞみなさん観にいらしてくださいね。

陸平縄文ムラまつり

田島早苗

世の中は段々生きにくくなり、ワーキングプアとかシークレットプア等という耳新しい言葉がしきりにテレビから流れてくるこの頃、年金生活ながら何んとか暮らしていける幸せに感謝しながらも、「職業を選ばなければ生きる道はあるのでは？」等とお節介婆さんの言葉が飛び出しそうになってしまふ。それとも山有り谷有りのでこぼこ徑を、必死で生き抜いてきた自分の人生に、今の若者達を重ね合わせることで自時代遅れなのだろうか。

何はともあれ、美浦村では今年も十五回目の「縄文ムラまつり」が盛大に行われた。

毎年お祭り広場に来て、広い貝塚のことや、文化財センターや里山交流館の存在すら知らない人が多いので、今回は模擬店等の販売コーナーや、

各種お楽しみみのイベントが行われる舞台は今まで通り縄文広場に設営されたが、縄文土笛・縄文クッキー・火起こし・弓矢・昔の遊び・糸紡ぎ・絵手紙・射的など各種体験のテントは下の里山交流館を中心に並べ、古代米の田んぼに立てられたコンテンツ用の案山子達と一緒に下まで足を運んで下さる客待ちになってしまった。

重く立ちこめた曇り空の下、まばらなお客が我が土笛体験のテントを素通りして行く。「此処まで降りてくるのは大変なもの、きつとお客様は少ないと思うよ」等とぼやいていたら、元気いっぱいの子供達に引つ張られて、段々人が集まってきた。子供達の首にかけられたスタンプリリーの札を見て納得。百円の体験料を払って土笛造りに挑戦する子供達が引きも切らず、今度は嬉しい悲鳴を上げる始末。我が土器部会の面々が三日間掛けて作り上げた案山子「縄文の女神」は皆さんの共感を得ることが出来るのかも大いに気になるところだが、それどころの騒ぎにあらず、一休みも出来ない事態になってしまった。せっかく来て頂いた白井氏と小林さんには、ろくろくご挨拶も出来ずごめんなさい。

用意した体験用の土三十五個が無くなり、お楽しみ抽選会が始まる頃だということで、漸く縄文広場へ出かけることが出来た。でもほとんどのテントで完売終了、片付けが始まっていた。とうとう何も買うことが出来ず残念。でも、千葉の加曾利貝塚から毎年参加されている学芸員の村田氏が、堅穴住居の燻蒸をしながら天井から吊るして焼き上げた秋刀魚の燻製を頂き、ご満悦の私だった。

今回はあらかじめ募集した俚謡コンテンツと案山子コンテンツがあり、表彰が始まった。そして

案山子コンテンツでは努力のしがいがあり、我が土器部会が優勝することが出来た。コンテンツに投票した半券の番号合わせでお楽しみ抽選会があり、何と一等賞の自転車を私が当てると言うハッピーングで今年の縄文村祭りはお開きになった。早く世界にも日本にも住みよい世界が訪れることを願いつつ。

《ことば座だより》

陸平縄文ムラ祭り

小林幸枝

十月二十八日、陸平縄文ムラまつりに行ってきました。昨年も、その前の年も行けなかったのが今年はずいぶん行きたいと、白井先生と一緒に出掛けました。まずは、オカリナの野口さんが縄文池で演奏するのでそれを見て、縄文の広場の方へ行ってみた。

縄文ムラ祭りは、美浦村の人達の手作りのお祭りで、出店やイベントなども全て村の人達が色々工夫してやっております。しみじみと、でもとっても楽しく、優しく、嬉しいお祭りです。思わず「良いな」と声を出したいようなお祭りでした。人間はどここの国の人もお祭り好きです。派手さを競うお祭りではなく、暖かさを競うお祭りこそ、楽しく嬉しいお祭りなんだと縄文ムラ祭りは教えてくれている様でした。

十月三十一日、東京・立川にお住いのクラリネット奏者の橋爪さんの家に行って、十二月公演の打ち合わせをしてきました。橋爪さんはまだ手話舞を見たことがないので、音楽を考える為に、ま

だ未完成ですが朗読手話舞を見て頂きました。私が舞い始めると、橋爪さんは直ぐに即興で曲をつけてくださいました。クラリネットの音は初めて聞きましたが、優しい音に聞こえました。

十二月公演では、また柏木さんと一緒に舞わせていただく事になりました。橋爪さんのクラリネットの演奏で美しい舞いを創りたいと思っています。

できることをできるだけ

白井啓治

ことば座十二月公演は、「涸れた龍の涙」。石岡市にとってもっと大切に考えなければならぬ龍神山をモチーフにした物語で、今回で五作品目になる。龍神山をモチーフにした物語を書くのはこれで最後にしたいと思っている。

『二千年に亘って常世の国を見守ってきた龍神山の龍が自分の星に帰るのだという。龍は寂しげに言った。この国に流す涙は枯れてしまった、と。』この龍の涸れてしまった涙となって小林幸枝が舞うというもので、今回はアーティスト集団カーニバルカンパニーを主宰し、オペラシアターこんにやく座を始め様々な劇団や合唱団など多様な音楽シーンで活躍しているクラリネット奏者の橋爪恵一氏を招き、クラリネットと手話舞のコラボレーションとなります。

橋爪氏の奥さんでプロデューサーのしおみえりさんは、私のアシスタントとして長く一緒にやってお来た仲間です。仕事では二十年強のブランクなのですが、柏木久美子さんからホルストが伊藤道郎のために作曲したという「日本組曲」の話し

を聞き、この「日本組曲」を主題とした朗読舞劇をやろうと思いついたことが切っ掛けとなって、また一緒に表現活動を始めようということになり先ずは今回の舞台共演となったわけです。

昔のよしみで塩見君と言わせてもらいますが、彼女は、昨年の大震災後、できることをできるだけプロジェクトを立ち上げ、宮城県吹奏楽連盟が窓口に楽器 BANK を設け、楽器を無くした子供達へ休眠楽器を届ける活動をしてきました。そして、この夏、日本から奨学金を受けているパリ音楽院、ジュリアード音楽院、ウイーン国立音楽大学の奨学生達とサンドリーホールで交流コンサートが開かれました。

また津波によって使い物にならなくなってしまった石巻の「かめ七呉服店」から処分されようとした着物、反物を譲り受け、チクチクモノプロジェクトとして、リメイクドレスやシャツをつくり舞台衣装としてリリースし、その収益を支援に役立てています。

さらに 5x5 NEXT と称して被災した布を生かし、タペストリーにして震災の記憶を「伝え続ける」活動をしています。

今回のことば座の舞台装美は、何時もの兼平ちえこさんの常世の国の五百相とこのタペストリーがコラボレーションします。タペストリーの中には、柏木さんの指導している美浦バレエ同好会の作ったタペストリーも展示されます。

先月二十八日に、小林と一緒に「陸平縄文ムラ祭り」に出かけてきた。毎年思うのであるが、いいお祭りである。このお祭りの会場で、市川さんが一人で出店を出していた。見ると「東海第二原発廃炉」の署名であった。「もう古くなった原発は

廃炉にしようという嘆願署名です」と通りかかる一人一人に声をかけておられた。村長を四期も務められた方である。一人で自分にできる、やるべきことをやられていた。

塩見君の「できることをできるだけプロジェクト」もそうである。自分の起こせる行動は小さい。でも、自分のできることをできるだけ無理せずやる。長くやる。継続し伝えていく。

私は物語作家だから、物語を作り続けることが自分のやれる事。自分が出来て、やるべき事は人に評価されることを望むことではないので、自分に恥じない様に自分のペースでやる。それが大事な事だろうと思う。そして、信頼できる友たちは、気付くと皆そうしている。

「できることをできるだけプロジェクト」良いネーミングだと思う。皆でこれを利用して頂こう。

いいね、いいね、それいいね。おもしろい、面白いよ。OKーOKー

こんなセリフばかりを忘れた。

いいね、いいね。こんな言葉で今年を締めくくりたい。残り一カ月に今年も終わる。

ちよつと若返った「ふるさと風の会」である。

(白井)

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発「ことば座」第24回定期公演

「常世の国の恋物語」第31話

新龍神山伝説 「涸れた龍の涙」

2012年12月1日～2日 (14時開場、14時30分開演)

涸れた龍の涙

二千年に亘って常世の国を見守ってきた龍神山の龍が自分の星に帰るのだという。龍は寂しげに言った。「この国に流す涙は枯れてしまった」と。

橋爪恵一の奏でるクラリネットの風に乗って小林幸枝が龍の涙となって舞います。

二つの祈り & 小夜子の夜

第23回公演から柏木久美子が伊藤道郎のナンバーを山本光のピアノ演奏に舞っておりますが、今回は「二つの祈り」を舞います。

また、橋爪恵一のクラリネットの調べをバックに、亡き友・山口小夜子を追悼して、網谷厚子の詩「小夜子の夜」を舞います。

小夜子の夜 (詩・網谷厚子)
白い水の底で
透き通る絹の衣を靡かせている
頭から被り
ふわふわと足音もなく
飛ぶように軽やかに
絹の身体を滑らせて
両手をまっすぐに伸ばし
伸ばした先の手のひらを
蓮の花のように丸めて合わせる
いとおしそうに
頭を揺らしながら見つめ
また何回もくるくる回したかと
思うと
開いていく
低い声で
太鼓のようにリズムを刻む読経

クラリネットと手話舞とモダン ダンスのコラボレーション

「恵みの詩」

人はさらさらと流れる言葉を聞いたとき、心もさらさらと流れ出す
人はうるうると心揺れる言葉を聞くと、心もうるうると揺れて何かを予感する
.....

今回の舞台は、兼平ちえこ作「常世の国の五百相」に、東北復興支援「できることをできるだけプロジェクト」(代表しおみえりこ)が進めている『宮城県石巻市の津波に遭った着物で震災の記憶、原発 NO「伝える」活動』ちくちくきもの5×5のタペストリーをコラボレーションした装美の中で演じます。できることをできるだけプロジェクトでは、被災した着物でリメイクした舞台衣装をリースしており、その収益を復興支援活動に充てています。今回の柏木久美子の舞衣装は、被災した着物をリメイクして造られたものを着用します。

※入場料3000円(小中学生1800円)ギター文化館(0299-46-2457)にて発売しております。

朗読舞劇団 **ことば座**

〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

Tel 0299-24-2063

fax 0299-23-0150